

どこでどう。。。
間違えたのか??



人生最大の
誤解

maraikajapan

「 人生最大の誤解 」 の主人公は 私の友人であり

本人の了解も得て 公開に至りました。

彼は 現在66歳になります。

結婚、出産、起業、出世、離婚、病気、弱視、孤独・・・と彼の人生はすさまじく恐ろしいものでした。

わたしとの出会いから 約2年 彼は 「 自分 」 を再発見したり

孤独な人生から 復活を 始めるきっかけとなったようです。

離婚後 糖尿病が発覚し 食事制限など 日々の生活自体にも

苦勞するしているのは 「 視力 」 が 極度に落ちていたからでした。

単なる弱視ではなく カルシウムが眼球の周りに 停滞する体質らしく

すべては 白く白濁して見えてしまうのです。

また、右目と左目が 遠近感のバランスが悪く

チグハグに 見えているのだそうです。

熟年離婚・・・ということになります・・・

すべてを奥さんに渡してからの 彼の生活は・・・

悲惨としか 言いようのない時間を過ぎたこともあった・・・そうです。

しかし、 彼は 意識を変え 考え方を変え

「 人生はまだ終わってはいない 」 と、心を奮い立たせ

再出発したのです。

今現在は 「 胃がん 」 を宣告され

さらなる 障害を 乗り越えようと 頑張っています。

もし、よろしければ 彼に対して

たとえ、どこの誰かもわからないにせよ・・・

「 人生最大の誤解 」 の主人公の66歳の男性の胃がんが よくなりますように 」 と

祈っていただけたら・・・うれしく思います。

3 結婚生活

4 孤独 と 出発

5 あとがき

彼は私の友人である。 65歳 ただいま独身。 大阪で暮らしている。

当時 彼は あまりしゃべらない人だ・・・と思っていた。

紳士的で・・・物静かで・・・知性あふれる中年男性・・・といったところでしょうか。

糖尿病を持っていて 視力 聴力に、障害を持っていた。

あるサプリメントで 彼と私の共通の友人が

わたしに紹介してくれたのだった、すでに2年近く前のことだった。

「ひとり暮らしは 不自由でしょう？」 など、

ごく一般的な 話ばかりをしていた。

で、あるとき ある会話の中で 彼の優柔不断を見たとき・・・

私はつい 言ってしまった・・・

「あなたは 本当に 病気を治すつもりがあるんですか？

見えない・・・とか、聞こえない・・・とか、 できないことばかり言っても

何も始まらないんじゃないんですか？

あれもしたいこれもしたい とか、将来の夢は 語ってくれても

できない理由ばかりを 言ってるうちは 何もできないとおもいますよ。

本気で治す気がありますか？」 と、きつく言ってしまった・・・

しばらくの間は 沈黙が続き・・・（数日間もの間）

ある日 こう言ってきた・・・

「あなたの言う通りだ・・・これからは真剣に 治療しようと思う・・・」 と。

で、この日以来・・・わたしは

「わたしも手伝う」 ことを約束したのだった。

あれから 約2年・・・彼の糖尿病の数値は・・・

今・・・ほとんど、標準値になった・・・

この・・・糖尿病になった・・・原因・・・というのが

この本の タイトル でもあるわけで

結婚当時から 話を 振り返ることにしよう。

二十歳のころ・・・彼は恋愛をしていた。 まだ、学生だった。

結婚する・・・つもりだった恋人がいた。

ある日 恋人が 借金を申し込んできた。

理由は 恋人の父の会社が・・・倒産・・・しそうだというのだ。

彼は両親に相談し 「貸してほしい」 と頼んだ。

当時彼は学生で 貯金などなかったのだ。

しかし、両親は・・・ ダメだ・・・との返事だった。

彼はサラ金に行ったが 若さゆえ 希望通りのお金が 貸してもらえない。

なので 泣く泣く・・・彼女に 「用意できない。 助けてあげられない・・・」 と言った。

その直後・・・彼女の一家は・・・行方が 消えてしまった。

半年くらい経った後・・・かれは 彼女を探し回った。

人づてに 「 アメリカに行ったらしい 」 と聞いた。

数か月が過ぎていくうちに

彼のことがずっと・・・好きだった 別の女性が 近づいてきたのだった。

恋人がいるときから、その女性は ラブレターを たくさん 彼に書き続けていた。

恋愛中の恋人が・・・消えた・・・と知り 彼女は接近してきたらしい。

で、彼も 彼女と・・・結婚することにした・・・

愛してなかったわけではなかった・・・が、

「 もう・・・だれでもいい・・・」 と、考えなかった・・・わけでもなかった。

「 なぜ 彼女を探すことを・・・あきらめたのか・・・」 ということが

彼の・・・今なお・・・後悔の一つである。

しかし 時は すでに 40年以上・・・経っている。

彼は 誠実で 責任感の強い男である。

男として 一家を養い、幸せにするんだ・・・という 人並み以上の

「 いい夫、いいお父さん 」 といってもらえるために・・・頑張ってきた。

彼の奥さんになった女性の実家は 金持ちである。

結婚する時 義父は 「 ほんとにあれでいいのか？

あの子はきついから・・・苦労するぞ・・・」 と言われた。

それから、彼らは 東京で転勤生活を 始めるのだった。

東京へ行く道中 車で あちこち 回りながら、旅館に止まったりして、

一週間ほどかけて 東京についたのだった。それが新婚旅行のようなものだと、言っていた。

東京での新婚生活はまずまず、いわゆる 「 普通 」 の新婚生活だった。

奥さんも 優しくしてくれたし、幸せだったなあ・・・と話していた。

2年ほどたったころ、 再び大阪に転勤・・・となった。

マンションを契約したが、その場所は

彼女の実家の近くだった。

彼は 「 いい夫 」 に成るべく がむしゃらに働いたのだった。

高給取りで すごく稼いでいたのだ。

コンピューターのソフト や プログラムなどを設計する仕事で

どんどんお金がたまってきたのである。 普通以上の高給取りだった。

じきに子供にも恵まれ、男女一人ずつ 授かった。

10年ぐらいたったころ、 「家を買う」 ということになり

その実家の近くに 立派な家を購入することになった。

子供たちも年頃になり 私立の中学高校と、お金がかかる年頃になり

彼はますます、働くことに精を出したのである。

また、家を買った・・・ということもあり、 「独立」 することを考えた。

奥さんは・・・反対した。

しかし、彼も男である、チャレンジしたかったので、

思い切って独立し、自分の会社を立ち上げたのだった。

最初のころは非常にうまくいっていた。

毎月何百万も収入があり、万事うまく進んでいたのだった。

しかし、彼は家のいる時間が 少なくなり・・・留守がちになったのだ。

学費も高く 家のローンもあり とにかく、働くことしか頭になかったそうである。

子供は特に女の子がかわいくて 仕方なかった。

「 この子には 絶対に幸せになってほしい・・・」

そのためには 親として できることは何でもしたい・・・」 そう思っていた。

また、この娘は 優秀な子で 学業にも秀でていた。

なので・・・エリートコースを進んでほしかった・・・というのが彼の望みだった

。

結婚する前に・・・一流の企業で その能力を発揮して

社会人として 一目置かれる人材になれる・・・と信じていたのだ。

彼は軌道にのっていた仕事に プラス 新しいことに挑戦しようとし

奥さんに話した。

すると、彼女は 「 ぜったい失敗するから、しない方がいい、このままでいい」
と言った。

仕方なく あきらめてしまった。 彼は争うことが大嫌いだった・・・。

それから また 数十年たつうちに・・・

いつのまにか、 自分の存在が・・・ない・・・ことに気がついた。

いつも留守にしていたのは・・・遊んでるのではなく・・・仕事だった。

彼女は 彼の取引先からの電話を 彼のポケットベルにつながらないように

いつも受話器をあげて・・・話し中にしていた。

怒った彼は 「そんなことをしたら 信用を落とすから やめろ」 と注意したが

従うことなく・・・ずっと続けるのだった。

あるときは 彼が受話器に仕掛けをし 話し中にならないように

したのだが、 いつのまにか、仕掛けは外され、再び話し中になる始末。

このため・・・取引先から とうとう、「取引中止」 を宣告されてしまった。

学費、ローン・・・と支払いがあるので

「なんとかしないと・・・」 と、思い 深夜の長距離運転手のバイトを始めたのだ

。

昼間は会社、夜はドライバー・・・と、ほとんど眠らずに

必要な分の生活費は 滞ることなく 奥さんに渡していたのだ。

朝方に帰ると・・・テーブルの上には 「 おにぎりひとつとアジの干物 」 が置いてあった。

ごくたまに 家族で夕食を とれる日があると

「 稼ぎが少ないから これしかおかずはできないよ」 と、質素なものだった。

それでも、バイトで稼いだ25万は奥さんに生活費として渡し

それとはべつに学費、生活費の支払いは 彼がやりくりしていた。

ある日 家族の意思の疎通が・・・おかしい・・・ことに気がついた・・・

会社とバイトの二つの仕事を掛け持ちしたら ほとんど家に帰ることはできなくなっていた。

そのために奥さんは・・・そんな彼のことを・・・

・・・彼が浮気をして 家に帰らない・・・と思っていた。

また、パチンコばかりして 家族をほったらかしにしている・・・と、

子供や実家の両親や 親戚にまで それを吹聴していたのだ。

「とんでもない！ 一度たりとも そんなことをして過ごしたことはない！」 と

反論したのだが・・・全く 家族に信じてもらえなかった・・・

奥さんに毎月ちゃんと 生活費を払ってきたのに

どこに遊ぶ時間などがあるものか！ と、説明しても 無駄・・・であった。

日夜働き 睡眠時間も一日平均2時間・・・という生活を

25年間続け・・・次第に・・・仮面夫婦・・・になっていった・・・

そんなある日 奥さんの実兄が 事業に失敗し

大金を借りることになり 「保証人になってほしい」という申し出があった。

奥さんは反対した。 が、彼は 気の毒に思い・・・ハンを押してしまった。

2か月ほどたった ある日 実兄は 急死してしまい

保証人になった彼に請求が来た・・・

約3000万という 借金のため、彼はとうとう・・・家・・・を売ることになってしまった。

「だから、反対したのに」と奥さんは 彼を 責めたのだった。

こんなこともあり、さらに夫婦の間には溝・・・が入っていったようだった。

そのうち・・・

「離婚してほしい」と、彼女は言うようになり・・・

ことあるごとに・・・彼に迫るようになった。

まさか、本気だとは思わなかったが、あまりにしつこく言うので

離婚届にハンを ついてしまった・・・のだ。

しばらくは 何の変化もなく 同じ生活が続いていた。

朝方帰宅して キッチンに行くと

おにぎりひとつ と アジの開き・・・が置いてあった。

それを食べて 自分の寝室にいき、休むのだった。

ある日・・・家に帰ると・・・

家の中が・・・空っぽに・・・なっていた。

なにもなかった・・・

みごとになにもなかった・・・

金目のものは・・・彼のものまで、消えていたのだ。

少しの食器と幼い時の子供の服や賞状など・・・・があった。

彼はこの時・・・・

あまりのショックのため・・・・

二階の部屋に閉じこもり・・・・意識を失ってしまった・・・・

何日経ったのか わからず、

とにかく、真っ暗で 何も見えなくなっていた。

視界に入るのは・・・・暗闇・・・・しかなかった。

「俺は死んだのか？」 と思ったそう。

はいつくばって、携帯電話を探し

息子の番号を探し・・・・やっとの思いで・・・・電話をかけたのだ。

しばらくすると・・・・息子がやってきた・・・・

「お父さん、なにしてるんや！ちゃんと食べやなあかんやろ！」

と言って、2万円を彼の手に握らせて 帰った・・・・というのだ。

救急車も呼ばず・・・・こんな姿の親を・・・・

そのままにして帰った・・・・息子・・・・

私は信じられなかった・・・・

一方的に 片側の話だけを うのみにもできないな・・・とも思った。

が、彼はうそを言わない人だ。

こんな悲惨な話を つくれる人も そういない・・・・・・

彼の40年間の結婚生活は こんな残酷な形で・・・・

終止符を打たれたのである。

ある日突然 彼は 一人ぼっちになってしまった……

その日 彼は 家の中のものがすっかり 消えていたのを見て

ショックで 目の前が 真っ暗闇に……なってしまった。

文字通り……真っ暗で……何も見えなかったのだ……

意識がもうろうとし、立ってられなくなり……

子供部屋の ベッドに 横たわった

「何事が起こったんだろうか……」と わからなくなっていた。

そのまま 彼は意識を失い……

数日間……（覚えていないらしい）そのまま 子供のベッドで 眠った……

目が覚めると……

何も見えなかった……文字通りに……真っ暗闇の世界……だった。

彼は 「僕は死んだのか……？」と思った。

自分で自分の 手を触り、顔を触り……感覚はあった。

「いや 僕はまだ生きているようだ……なぜ、見えないのか……？」と思った。

這うようにして 手探りで 一階に降りた

だんだんと 薄明りは見えるようになってきた。

それから 携帯電話を 探しまくり やっと手にして

息子の番号を 探し出し・・・かけた・・・

数時間の後・・・彼はやってきた・・・

そして こう言った・・・

「 おやじ！ 何をしてるんや、 ちゃんと食べやなあかんやろ！ 」

そして、おやじの手に1万円札を握らせ・・・出ていった・・・そうだ。

食べないせいで・・・こんなことになってるのか？

いや。そうじゃない。

ショックで 見えなくなってしまった・・・のだ。

長年、昼の仕事と 夜のバイトをしていたので

睡眠不足と 栄養不足のせいで・・・

(栄養不良・・・になっていた と思われる。)

朝方に帰宅しても・・・テーブルにあったのは

冷凍おにぎり ひとつ と、アジの開き・・・だけだったのだから。

この生活を10数年もすれば・・・栄養不足にも陥るだろうとは、誰でも想像がつく。

視力は・・・回復せず・・・今も・・・まだ極端な弱視・・・である。

それからというもの 彼は そこから、逃げるように・・・

全く別の土地に移り住むことになった。

ローンで買った立派な家を売ったお金は 奥さんに渡し・・・

彼は引っ越し費用として 20万円だけ 要求した。

何もかも すべてを 彼は 「 家族 」 に あげた・・・

自分は 20万もって 長年住んだ土地を 離れた。

20万などはすぐになくなり・・・

まだ、仕事も見つからないまま・・・

借りた1Kのアパートは すぐに 未払いのため

電気やガスが・・・止まってしまった・・・

「 みじめだった・・・かなしかった・・・」 と、言っていた。

大きな家に残された つまり、奥さんが置いていった

子供たちの 幼い時の洋服や・・・卒業証書・・・

これらは 「 捨てることができない 」 と思い

1K のアパートに 持っていった。

その荷物だけでも 段ボール箱で4箱分 があったのだ。

彼のアパートは

荷物と、段ボール箱で・・・あふれていて・・・

箱に入ったままの状態で・・・

10年が過ぎていったのだ・・・

一人ぼっち・・・の生活にも慣れ・・・何とか、自立して

生きていけるようになっていた。

私と出会ったのは・・・ちょうどそのころだった。

彼は 糖尿病を患っていた。

視力は 0.004 ほどあった。これは 目の前10センチほどに近づけないと、見えない視力である。

聞こえにも 障害を持っていた。

幼い時から 鼓膜がなく 聞こえなかったそうだ。

視力 聴力 とともに 障害者手帳を もっていた。

やっと見つけたまともな仕事は・・・

パソコンを操作する仕事だった。

自分の能力を生かせる仕事を見つけた・・・

三日に一回・・・仕事に出かけていた。

夕方から 朝までの夜勤勤務だった。

初めは 一人で歩くのが こわかった

「 杖をついて歩く 」 ことに 抵抗があった。

そのため、よく 階段や段差を踏み外し 転げ落ちたことも しばしばだ。

そういうことをしてるうちに 度胸がついたのか、

障害者のような歩き方を しなくなっていた。

どこから見ても 健常者にしか・・・見えなかった。

私と出会ってから 彼は しばらくは 自分の境遇を何もはなさなかった

私は 彼を紹介されたとき 「 パソコンを教えてくれる人 」 としてだった。

後日 彼にパソコンを 教わるときに 驚いた。

むしめがねを 片手に 文字を 追うようにして 読んでいる姿を見たからだ。

「 そんなに目が悪いんですか？ 」 と尋ねた。

「 ええ 」 と答えながらも 理由はまだ言わなかった。

彼と付き合いはじめ 日に日に 私はパソコンのことを学べるようになった。

彼はさすがに プロだった。

彼にできないことない・・・と思えるほど パソコンについては何でも知っていた。

それからというもの 徐々に 彼は自分のことを話し出したのだった・・・少し
づつ・・・

今一人で住んでること。

目が見えなくなったこと。

昔やってた仕事。

離婚した時に 奥さんにすべてを渡したこと。

離婚原因も 自分には 理由がわからないこと。

誤解されたまま・・・家族が 子供たちが 去って行ったこと・・・

それで、わたしは彼を見て 感じるがあった。

「 彼は まだ家族のことを・・・忘れることができないでいる。

奥さんと二人の子供たちも お父さんのことを・・・

気にもせず 様子を見に来ることもせず・・・

遊びほうけて 愛想をつかされた お父さん・・・とされていることが

悔しくて仕方がない・・・」 と思っている。と。

彼は離婚したことを おじさんに 報告に行った。

おじさんの玄関前についたとき

「 お前を見損なったぞ！ この家の敷居をくぐるな！ 帰れ！！」 と

と、怒鳴られた・・・悔しくて 悔しくて・・・仕方がなかった。

彼は説明したかった。

奥さんの話は真実ではない、ことを伝えたかった。

ばくちや 浮気で 家族を見捨てたことなど 一度もない。

ただ 家族のために がむしゃらに 働き続けてきた・・・

奥さんに仕事の邪魔をされても、

契約を破棄されるようなことになっても、

自分から 離婚だと言ったこともなかった。

彼のお兄さんから 保証人になってほしいと 頼まれたことがあった。

「 実のお兄さんだから 引き受けよう 」 と言ったが

奥さんは 「 だめだ 」 と言ったが 彼は 保証人のはんこをついた。

それがために 数千万の借金を 背負ったときにさえ

家族に迷惑かけまいと 深夜の運転手のアルバイトをしていたのだ。

当時は お金を持っていたので 現金で3日後に返済できたのだ。

が、 生活費が足りないといわれたので、

そのために始めたのが 深夜の運転手だったのだ。

毎月25万の生活費を渡し、その他の学費や生活の支払いはすべて彼がしていたのだ。

そこまでして働いて 家族に不自由な目に合わせまいと・・・頑張ってきた
んだ・・・

なんで なんで、 僕がこんな目に・・・合わないといけないんだ・・・

と、とても、恨めしく思っていたそう。

しかし、彼は 息子の子供と嫁に毎年 誕生日プレゼントと

クリスマスプレゼントは 欠かさず・・・送り続けている。

息子や孫と会うのは 1年に一回ほど。

あのアパートに移ってから・・・息子は一度来たきりだ。

「おまえの荷物を預かっている、取りに来てくれ」と言うが

もうかれこれ 10年ほど・・・取りに来ない。

お父さんの様子も 健康も気にならないのか・・・？ と わたしは 思った。

「僕は きっと、子供たちにとって 価値のない どうしようもない父親・・・になっ
てるんやな・・・」

奥さんが洗脳した・・・と、彼は言っていた。

「あんたらのお父さんはね 帰りが遅いのは

パチンコして 浮気して 遊んでばっかりしてるのよ」と。

いちど、パチンコ屋さんの前で 3人とばったり出会ってしまったことがあった。

トイレが我慢できなくて 立ち寄った・・・のだが。

ちょうど出てきたところを 見られてしまったらしい。

「ほうらね！！おとうさんはやっぱりパチンコしてるやろ！！！」と、
子供たちに言ったそう。

「ちがうねんで、トイレがしたくて寄ったんやで」と、説明したが
3人の目は冷たく・・・信じてはもらえなかった・・・
自分が何を言っても、無駄だ・・・と分かった・・・
あれほど、かわいがった娘さんとは、もう長年言葉も交わしていないそうである。
引っ越した後しばらくは電話やメール交換をしていたのだが
あるときに「もう私に電話もメールもしないでほしい」と、言われたのだ。
その時に娘さんの電話番号を、削除した・・・といった。
「どうしてるのか・・・元気であるのか・・・会いたい・・・」と言った。
しかし、娘さんはお父さんのことを誤解してるらしい。
息子さんも同じく誤解してるらしい。
奥さんとは言う・・・
煙もたたないのに火が出た・・・と、親戚中に言いふらし
彼の立場を貶めた（おとしめた）のだ。
彼は親戚中からも破門され縁も切られてしまった。

この状況は・・・彼女が作った・・・と言っていた。

「でも、どうにもならない。これからは一人で生きるしかない・・・」

と、覚悟を決めて・・・今まで生きてきた・・・と、言うのだ。

わたしなら 私がもし、彼なら・・・

奥さんからの電話もメールも二度と受け付けない。

「あなたは私に会わせる顔はない。

あなたは私と口を聞くこともできない。」と、縁を切る。

二度とも交流を持たないだろう・・・

しかし、彼は優しいのか 何なのか わからないが

奥さんからの申し出を受け 時おり 会うらしい。

電話やメールもするらしい。

私は この件については 理解できません、と言ったことがある。

自分を 貶めた（おとしめた）相手に 応じることができることを。

ま、彼は私ではない・・・余計なことは言わない方がいいかな・・・と思った。

去年のことだ。

わたしは彼の部屋の片づけを手伝い

10年間も ほったらかしてあった・・・すべてのものを処分した。

彼の指示を受けながら 「捨てる」ものは捨てた。

たくさんのごみと一緒に・・・

彼の部屋は・・・片付いた・・・約ひと月かかった。

部屋にあった たくさん荷物や 段ボール箱は 消えた。

子供たちの荷物は・・・まだ、押し入れに中に残してある。

先日孫の発表会に行ったときに

荷物を取りに来てくれ、 と 再び 言ったそうだが・・・

わたしおもう。

子供たちとは縁は切れないけど、夫婦は もともと他人だ。

性格の合わない他人さんと 結婚し 長年の間に

築きあげていくのが夫婦です。

添い遂げられないほど 価値観が違うなら・・・

離婚は仕方ない・・・と思う。

が、別れた後・・・伴侶と付き合う必要は全くない。

子供を通しての関係しか残らない。

私はそう思う。

まして、侮辱されて 離婚に至らせた奥さんに対し・・・

今までと同じように付き合う・・・？ とんでもない。

わたしは彼の友人です。

彼女でも恋人でもないから なんの口出しも不要だから

好きにすればいいし、私とは関係ない人ですから・・・ 口をはさむこともない。

私と出会い 彼は少し明るくなれた。

私という異星人・・・？ は 不思議だそうだ。

自分とは違う性格の人との交流は 刺激的らしい。

で、彼の病気も少しずつ良くなり・・・健康体になりつつある。

目と耳は 相変わらずですが 「 気力・・・」 が変化したように見える。

65歳。 まだまだこれからだ。

この超高齢化社会では 65歳は まだまだ若い。

「 何とか生きてる 」 から

「 前を向いて歩く 」 に 近づいている。

悲観することは何もない。

心配することも何もない。

こわがることも何もない。

恐れことも何もない。

自分は何でもできるんだ、

自分はすごいことができるんだ、

一歩 一歩 階段を上がるんだ、

そんな気持ちで これからの人生を 歩くんだ！

って、これくらいの気力まで 上がることができました。

体のどこが不自由でも

見えなくても 聞こえなくても 病気でも

それ自体が 不幸になる・・・理由ではありません。

そんなことを理由にして

不幸になってはいけません。

「不幸」は、自分の心が・・・作るのですから。

「幸せ」は 自分の心が作るのですから。

状況が 幸せとか 不幸せとかを 決めるんじゃないんですから。

こうなれたら 幸せ。

これが手に入ったら 幸せ。

お金があったら幸せ。

健康なら 幸せ。

なにか、できたら 幸せだ・・・が もし・・・真実なら

その人は 何かを成し遂げられないなら・・・

死ぬまで 不幸でいるしかありません。

そんなことはおかしいことです。

幸せ というのは モノではなく 心で感じるものです。

盲人でも 障害者でも からだのどこかが 不自由な人でも・・・

そのことを理由に・・・不幸だ・・・と嘆いていては 幸せになれませんから。

わたしは彼とは 長い付き合いになりそうですが

彼の人生が 油切れで ぎくしゃくしたら・・・

油をさしてあげる役目かな・・・なんて思います。

どんな 苦しい人生でも どんな苦しい経験をしても

そのことを理由にして 逃げたりしないでください。

自分の身の上で起こることは全部

修行だと・・・思ってください・・・

そこから逃げ出したいなら、 本気で心から願うなら・・・

必ず 神さまが 手を伸ばしてくれます。

「私を助けてください、私をここから 救い出してください」と、

一心に念じてくださいね。

あなたが 本気で その苦痛から 逃れたいなら

あなたが本気で 幸せになりたいと 願うなら

そこに 覚悟 が あるとき・・・

ここを出たあと・・・

たとえ 私にどんな困難がやってこようとも・・・

どんなことをしてでも 必ず 乗り越えます！ という覚悟ですよ。

神さまは あいまいな覚悟の人に・・・

手をさしのべられる・・・でしょうか。

この 彼の人生を垣間見た読者さんには

どんな風に・・・感じたでしょうか・・・

人は一度はたたかれる・・・と書いて 命 と、読みます。

一生のうちの 一回は だれにでも 苦難がある（たたかれる） そうですよ。

「それを乗り越えて 幸せになるんだよ」 というのが

神さまからの・・・メッセージ なんですよ。

なので、彼はもう大丈夫です・・・

生きることの・・・意味を 今

気づき始めたから。

彼に限らず 多くの人に人生には いろいろな問題や困難や苦痛が付きまといます。

が、それらに 押しつぶされて 苦しみ続けて

人生を台無しにしてしまうか・・・

それとも

気を強く持って 立ち向かっていくか・・・

選ぶのは自分自身しかいません。

苦しんでいるのは 彼だけでは ありません。

世界中には もっともっと 苦痛を味わっている人がいます。

「自分の人生を どう・・・生きるかは 自分しだいである・・・」 ということを

もう一度 思い出して どうか 今現在の苦しみから

立ち上がってほしい・・・と強く願っています。